

西洋新書第四編卷之下

東京 瓜生政和編集

○巴黎斯府中才二の報説

○巴黎斯府中才二の報説
 大醫院だいぎやういんハ二十人中院ちゆういんハ十五人小院せういんハ八人あり
 病者びやうしや五人小附せうひゆう一人あり
 又別またハ「シ」と稱よする女あり
 女抱にようとさするあり
 信心しんじんハ因より不幸ふこうハ遇あはれどせしより陰徳えんとくと積つんで
 男女なんにょの交接けっごとさる病者びやうしやと扶たすんとせねがひ院いんハ入いる者

西洋新書 日編之二

あり故ふハシをうりの男女の分ちあり病者の分抱す
 ハシの衣食と貫ふのこめて給金と院より請ざる不囚り
 出入の心の俸ふして期限あり
 十三院の八方不散して建つとも是と総轄する役所
 王宮の傍らふありて大小の病院と支配する故病院
 へ入らんと欲する者の先る役所へむかひ官の許してけ
 て院へ入ることと定則とす院内の病者と上等下等小
 分ち一ト間むお数十の寮所とありべ病者としてとと小
 臥しむ臥床ふの二ツ小番号あり夜具の皆白布と
 用ひ室内の美麗卧具の清潔尽さる所あり冬ハ一ト間

毎小蒸気の管と通じて是と温む沐浴せむるの室
 或いは滝と掛けて天窓と灌するの所何とも巧みおいて奇
 麗ありおよそ病と治するの薬療と保養とふ因るもの
 るまは病院の趣意療治の勿論保養と専一とするあり
 故小食物の加減もく風の乾と雨の湿りと計りて其
 気と差引一節お應じて運動を為さむるが故ふら
 まの病院ふもかみらず清潔幽致の花園あるあり
 まる病院中別小幽室とくまると臥床お死尸と置と
 ろあり死尸の面部の布と以て掩ひとふ木の蓋と
 ろ一側お死者の名と年まら病体と委しく記せし

標札あり是ハ病元分明ならず衆医の疑案せしもの
 みて死者日数と経たば病の在るところより腐と敗
 りふ因りて医療の弁明の一端とするにぞ
 病院の入用の政府より出すとて初めを建
 とる府下の町々へ命と下りて銘々の貧富不
 出銀せしめらるり其後院内にて日々不費
 諸雑用の

第一 都下の有志の者より病者の救助と
 金と寄附せしむ

第二 都下の捨里あるひは芝居観場とりの生

活とする者より所得の金の十分の四を以て
 病院に收めしむ

是ハ人と捨むする者より金と納めさする
 とも實ハ然あらず捨む者の捨むるの餘
 財有ると以て病者の扶助とさするあり
 芝居より病院へ儲金の内の四割を納め
 とい其四割の捨む者の拂ひ代掛り價へ高
 ありて居るあり斯の如く西の西洋の各
 とも不他のもの比較といはば捨むるの
 高直あり

第三

貧困甚しと言ふも有らねど我家へ
 函師と招く力ありて病院に入るもの函
 薬の料とて一日お二十四文より一兩ぐらゐの迄
 と人々の分お應じて納めしむ
 政府の貸附所ふて質物と取るにありとの
 質物の一年と以て流しとるに利足の六分と
 納めしむ若質入をせしむるの期日お至つて
 請出さざるの流し品の品と入札ふて賣をらひ
 元金利息と差ひを控餘り金出といは是と
 病院の入用お做すとらふ

第四



。玻璃の
 海魚と
 畜ふ

海魚と畜ひ置とら有り
 いと大いなる深き鉢と玻璃
 小く作り是お潮水と湛え
 石沙藻かよひ貝類と下小
 おさ突の海の底の極小を
 此中へ鯛鯖鮫など始め
 とて一鉢ツバ部類と分
 け数種の奇魚と養るひ
 あり鉢の傍ら小寄しお分
 明お玻璃より透き横くら

もつえ腹の方からゆえゆらと我朝東京までふて波濤
の畧へ金魚と入と置まど齊一まて夕典の奇ある
もの数十種あり是と畜ひかゞ波濤の鉢の惣数二千
小餘とらうと言へり

巴黎期の都下の魚類の價上の外高しその故に
當町海小遠く百里足らずと往ねい濱辺へ出ざる
ふ因り魚と運ぶふへ塞納河と蒸気船ふて送る
う鉄道と蒸気車ふて持込むありまて是と田ふ
小の魚船の底へ簾とけ簾の上へ氷と対へ氷の上へ
麥藁とと其上へ魚とあさけ魚と少一雜一と

まく簾を掛氷を双べるの仕方始め小同一斯の如く
あるを以て氷小麥藁に金砂も安くうねが魚價の高直推
く知るべし

塞納河の南の岸小禽獸園あり獅子虎豹象熊獨
狼の如き猛獸と集めその部類を分て大いある鉄の
圈の下小車と附引歩けり格おあるお小胸ふ獅子怒て
吼るときの声銅鉦を鳴すが如くおいて聞りの耳お
震へりまて大神楽の冠る獅子の頭お似たる面の
海獸あり大きき牛小齊一くして惣身の皮蝦蟇の
如く日ボボダムとらふ甚く猛一南亞米理加小産する

のとぞ矢張同国より持来
 る蟻蜂あり身の圍り一尺小
 餘る寒さをとるを以て箱の
 中へ入るとフランセットにて包
 む又鱧鮫の類もあるあり
 別々各人の骨を組とて
 飾付たるものあり骨格
 大畧相同ト一身ありてニツ
 首ある骨あり鯨の骨大蛇
 の骨とて小至りての全身



の骨ト車おもむけ除るべし
 シヨシとて植物死ありとの所
 木のこゝと集めて植たり熱
 り蒸気の仕掛めて是を温め
 草の奇品と集め紅魚白魚
 飼ふ鳥の種類を集めたる
 異品の外小鳥の数百種あり
 爰に集め一歎類ハ牛馬
 画刺比亞の地を産する一
 カングロウとての獣あり

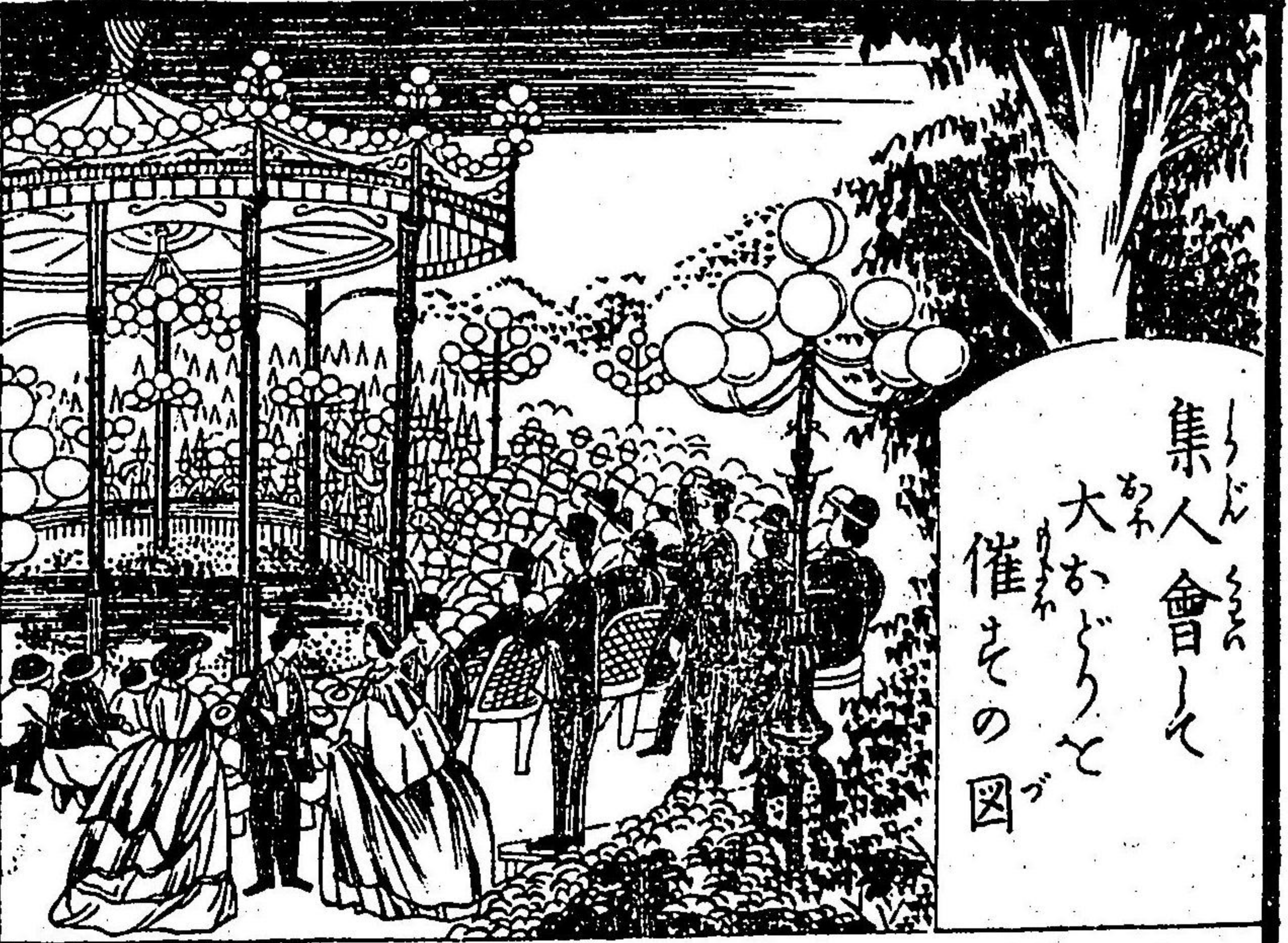
大きく後足ふく立て走ると甚るる早一社の腹の皮二重ふ
成り子ある時の外の皮ふ子と入とて養ふは腹掛の隠
一物と置が如し

劇場の華麗廣大もまづ目と驚うせり、舞臺の上へ二百
人余とあす回り舞臺せり出り中あつたり皆あま
ど花道あくまづ掛幕のる元より狂言と興行する
の夜ぞうりあるゆゑ舞臺中数百の瓦斯燈四方ふかけ
る五色の玻璃障子ゆ移り色どりの美しき光りの明る
る人の眼の毛と筆ふざり道具立仕掛あ至りて山間ふ
滝と落し海の上ふ船と漂蕩し官殿樓閣の模ゆり雨

中のまづ月の晴るる体或ひ陰晴定まらざる又の明暗と
あす変化実ふ妙巧極まらざる狂言の筋立の往昔の英
傑が国のあふ忠義と尽すの事と以て昔とあ一問々へ
人と笑つするの道化とまづ一幕あま二幕あま三幕あ
あしあり狂言中仙像神女あど空中より下り来
るとあ何処ともあ祥光と放ち人の目と射るあ
の妙と頭つせり狂言の言語少く歌謡と音楽あ合せて
仕形とするあ多し

劇場の旧幕府の時の能狂言の如く国家の大礼
あつて其事終るる或ひ隣国の帝王あつてあ

使臣等来るとは是と劇場へ請待するに歐羅巴一般の礼式あり故に帝王とらども皆劇場へゆく然れど平民に至りては礼式も関係らず心のまゝ見物するに我朝とあるに芝居観場の木戸の日本東京の如くはあらず至極柔和にして寛大あり見物人への誰れ負むとらふて矢張あるより跳舞の王宮を始め諸役人より下万民まで是ともならずと既し亞米理加の條に言へるが如し私宅中である茶亭へ持出すあり是と催すあり前びり招待書とまゝに當日に至るとは客のくる礼腹ふて来る



集人会
大あつて
催すの図

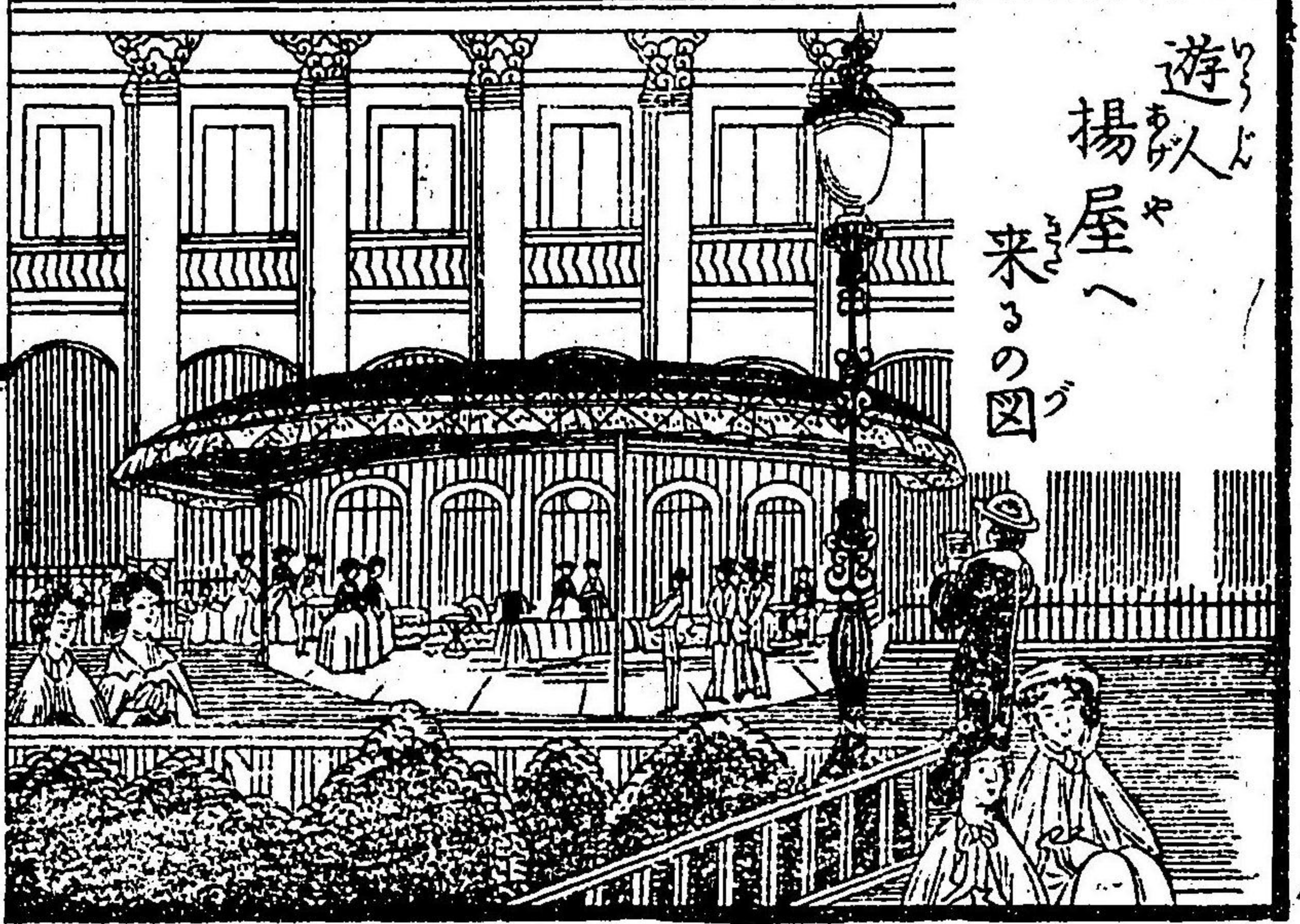
と常とあらず跳舞の趣意の自他の交際を厚うし一ツは八年頃の男女の舞のありて相互に容貞と見知り言語と交ひて賢愚と察し自ら配偶とえらと求めむるの端とするやえ慢りるらざると旨とすけ會遊と佛蘭西のハルと言ふまゝ當府に於て夜茶會

と催すとありともも又礼會の一ホーク脱族知音の
 男女と夜食すさうり集め茶まて日イル葡萄酒
 とうと出しく笑談雑話一夜と明するありけ會の
 趣意も夫張交際と厚くせんとする専勢と一傍
 ら表向ふ談下て角立やうと思ふとるどあまの當
 夜の席の打解け話一ホーク彼の我々志と知り我
 彼が志と知ると要すも急小一局の頭役するもの折
 節茶會と催や一局中の諸官員と集め懇親と
 厚くして親しく各の才能を試るとりふ
 抱女屋あり抱女のこる蔭に世をさう家の中一這り

て見立るるり夜令見立るとも氣ふ入りくる者みけ
 其処と出く他の家へ往も妨げき抱女と買ても藝者と
 揚げ幫閑と呼び座りさの大一座るさうの騒ぎなる
 西洋ふての酒と飲お肴と用ひざるも甚臺のものを取る
 とうのともみー抱びお上りても葡萄酒日イルるどりか
 酒と一寸飲早るるり抱客多く一切抱びおいて我朝の
 長屋と称するものみ齊一切抱びの代十二枚ありと
 買切とすさう一益夜おいて揚代金三十兩さうと
 酒食の彼の方おて賄ひ客芝居見物さうの花園と
 婦と誘つて出さう往返の馬車の代も婦の方おて

出するあり抱女ハ我國の如く親方ありて女と抱一切り
 するふ有らざる抱女の宿するもの方へ諸方より集り
 来るあり故に抱女の銘々の自の稼るものも我朝の
 女郎屋の多りも婆々の如きもの有りて抱女の総体
 のメ縊りと爲るあり抱女とりども我朝の如く襦と
 着簪とさう饒るの装ひは多く矢張常の女の持へるほど
 華美と専らと爲るもの何処やら目立とありあり
 政府ハ一月ハ一度づゝ醫師ハ命ト抱女の陰中と
 改とむるトあり陰中と改むる日ハ醫師抱女の宿
 小来りて宿ハて渡世するごけの抱女を集め醫師細

き管の先ハ眼鏡あるもの
 と以て陰中へ差込とその
 管と覗と一人ハハ頃と
 追て改め往るりこまの瘡
 毒あるものを抱女とすれ
 ハ買者ハ傳染一病身
 まつゝの廢人となるり死ハ
 至るも少るりならずその毒
 と他へ傳染一子孫へ傳へ
 るど一ハ人の身ハ害と爲



遊人
 揚屋へ
 来るの図

すて甚くさか故小斯子細小改むるまが陰中
粟粒の如きもの出来たるも瘡毒の症をば全く愈
ざるうち客を取ると固く禁一假令陰中おひらり有
りても毒氣抜るる客を取らするごと

巴黎期ふての抱女より我朝の引張と号くるが如き買
女多し引張の夜ふ入り往來へ出て客を待り買んと
思ふもの其女と見立今より何時までも何何との
價ふて抱がせるやと問ひ女哉々らと言ひ買もの何程
お負ろと重切り相談極まら女の家へ往りまらと重と
極めずして女の家へ往り女と裸おる一濕毒瘡どりの

気ささと見届けし上ふて重とさめるあり裸やしてさ
とも重後調いさその其家と出で去るも陰意あり然と
ども人情さとの裸体やりて見るどぬまへ買ずしてさ
者の稀多し抱女の一切抱びやりて價廉直るるが故小下
等の人爰ふ来り引張のさう女の家へ往りどるまが
抱びの時間長さを以て價高直小騰るゆゑ上等の人の
晒落とす我國ふて言ひ抱女の切見世の女引張の産ぬ
ゆりの傾城のどいおふも言さう如く抱女まら引張の
類ひの女と買ても産りさの内の騒がさけまが酒食の
費へ少くさう税幾と出花とさるるまら多一切

料理茶屋の我朝東京の會席の如くおいては方
 より何々と言て誂らるお非ず飲食の品の先方おては斗
 ひ順序とさめて出すあり給仕するものこそ男おては
 の間の客の誰彼処の間の客の彼と銘々の持の序の定
 まらう給仕男お花とをるてあとも花に至つて軽少
 おいて一冬二と常と多くて六冬お過ず料理も
 他より誂へて請て持出すとらふと更お
 我朝の水茶屋お似るものあり爰お一咖啡と云ふ
 物の入り湯まら茶と出す

茶の支那或は日本より持渡りて製し
 のおて至つて濃く煎じて飲るり然れども日本
 人おどの彼の国の仕法おては味は美しめらすまら加
 非の西洋各国おて茶と共に並び行はる
 亞刺泊巴西とりの熱国お産する豆の如く菓実お
 して是を焦しその煎汁お砂糖と和して用お苦味
 あるを以て曹中とすうせ飲食の消化とよくす
 目力とりの地おちと最上の品とす珈琲西洋の
 諸国おて一年お用ゆるところの惣高六万石
 余お至る

珈琲の功能

第一 加非を服すと眠気と覚すあり

第二 暴食と為す後 是と酒のこ猪口一杯やど

濃く煎じて飲べ大いお消化と助るあり但し是

と共に牛の乳と飲と忌べ

第三 喘息病のある人は是とのめ大いお功あり

悪血の多き人常お朝飯代て扱へ居れ

大いある害ありと言ふ

「ビールと言ふ酒葡萄酒」として初め西洋酒猶種々あり

西洋の菓実より取る酒と穀物より製す酒あり

彼の国の人の説お菓酒の温補滋養の薬劑あり

て虚弱ある人お大いお効あり 日本のお米お作る

酒の西洋お火酒と称へ烈き味ひあると以て

虚弱ある人お害ありと言ふ 菓酒の中お蒲

桃酒と以て最上の良薬とす 當国の羅雨河の南

の方波爾多府より賞巴尼のありて葡萄を培

養と夥しく其実と以て数種の酒を醸す故お地

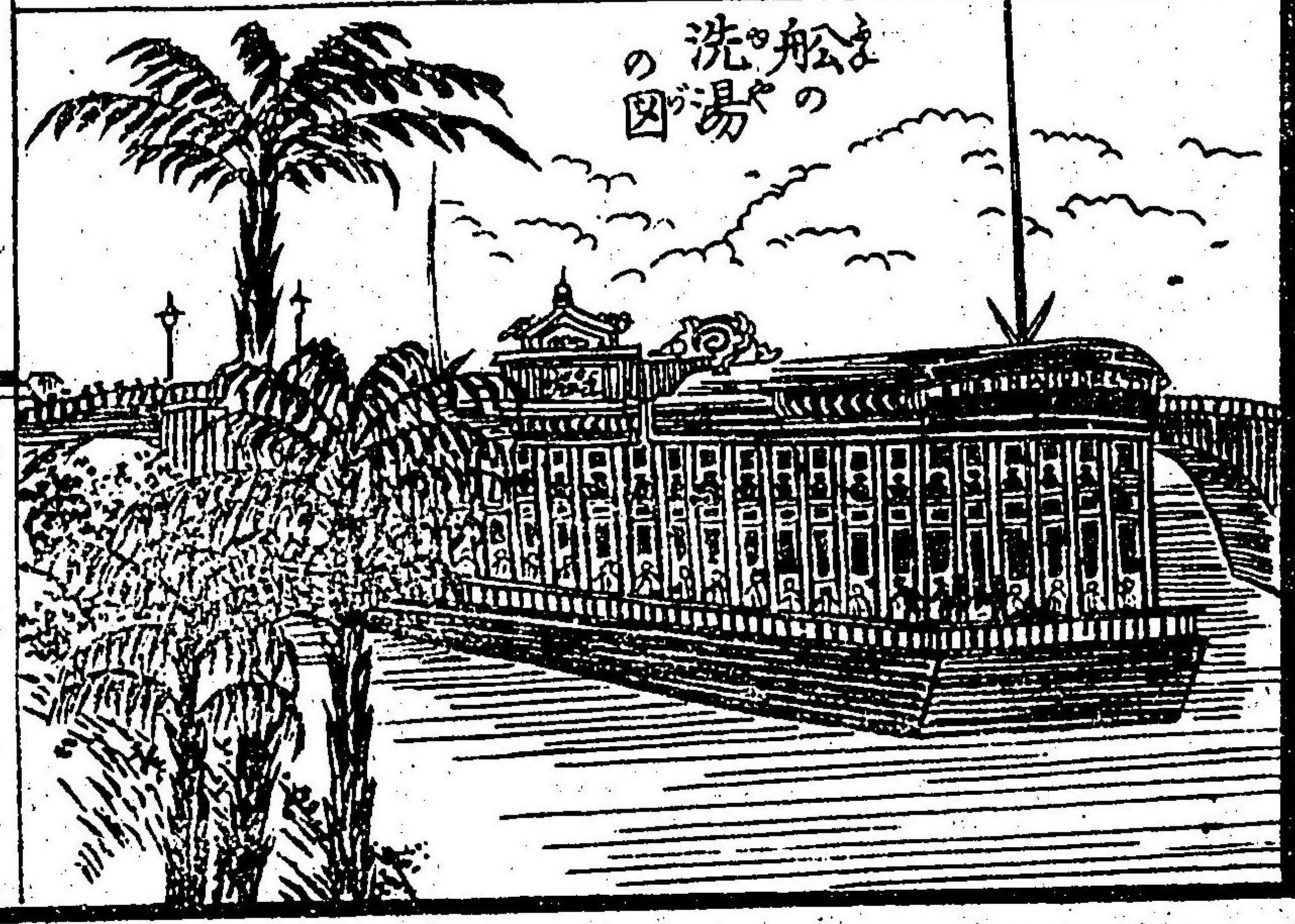
名を採りて酒の名お負し「シヤンハンエ」と

支那人譯して三邊酒とするもの是あり

葡萄酒、ビール酒とも一杯六枚茶もまろ一盃六
枚ぐらゐあり

然まども前おも言るが如く酒を飲おの肴を用ひされ
是と居酒屋といひても宜しきや近ごろ日本おも暑
氣のころおの水茶屋お焼酎本直一まどと賣るん
世あり是らと一ツ類ひまども葎簀をり竹の柱ら
とりのものいさく皆廣らうある一大家あり
風呂屋も至つて美麗あり湯銭六枚お拭石鹽
とりの湯屋より出すまろ塞納河の中お船の風
呂屋あり是と巴黎斯の名物とす船のまん中と

廊下とわー左右お風呂の間
らち双びく四十わどあり船の
風呂の湯銭十二枚お石
鹽手拭、矢もり先おぬん
風呂場のゆりの亞米理
加ゆ説ととらと一ツおぬん
読あらせし知るべし
髪結末の當時の日本東
京のらまろどく大概あり
然まども廻りと号けらる



船の洗湯の図

髪結いなり

女髪結の結ふ廻るあり女の髪は簪の耳搔のるさねを
ものふて所々と出るゆゑ一人の髪ふその金と二十本
ねどもをる

女の髪は粧ひの黄金へ珊瑚の珠をいふ飾りとつけ
ると掛け銀の一切用はず耳朶へ穴と明け黄金或ひの
珊瑚珠とりの輪をけよふの両方とも腕輪とをぬ
指もまゝ指輪とかけ都て西洋各国の女の風俗の
けととろと元と英吉利の龍動とらども巴黎風と
て洒落もの皆巴黎風の女のる似とあるあり故ふ

西洋の女の粧ひの流行の當府下と以て本とぬす

西洋婦人の多く大袴もけととろより流行出せし

ものふて三世拿破崙帝の后妃今の太子と乃子

いとと腹取りいけく大きく脹らこけ色は是と隠

さんかぬめ始め大袴と工風にて用ひらうし其

姿いとよりいとく孕まざる者まぐ皆着しその風

りらうら各国お押移り今も常の勿論礼あ

とらども是と着せざるると得ずと言ひ亞米理

加の條下おも説ととがえ合しと詳るらん

寺院お我朝の縁日のどらとありて入々冬詣す

然まじも神前かみに向むかひ賽銭さいせんと投なぎとりの事ことあり
 花はなと供とも香かと上げ或あるひハ蠟燭ろうそくと捧たまはるゝ夫々それぞれの
 料りょうと出いて頼たのむ經きやうと誦まもむ神前かみに向むかひ椅子いす小腰こわし
 と掛かけ居ゐるとりども神かみと拜たますとも平伏ひれし兩
 手てと突つき頭あたまと下くだると我朝わがあしたの礼れいのどど斯ごとの如ごとき拜たま
 へ天子てんし王候わうこうお對たいするともとも為なさず只ただ神かみお礼れいまするの
 時ときお限かぎまらう縁日えんぢつおお商あきなふハ子供こどもの翫あそび弄物あそびもの或あるひハ草くさ
 花はなどみ人ひと飴菓あめ菓子かしの如ごとき食物しょくじつの賣うり買かひるるる只ただ菓か
 實みの珍めづらしささをどあまあま稀まれお商あきなふものももえん也
 巴黎パリ斯スの市いち中ちゆう第一だいいちの美景びけいととなる所ところハチエイレリー

宮みやの表門ひょうもんおおブラスデラコンコルデの町まちありけけととら
 へ渡わたせざる程ほどの平ひららある廣場ひろばをれども清潔せいせつゆゆて二に寸すん
 の莖こゝろみももり廣場ひろばの中央ちゆうちゆうお二ヶ所ふたヶところの噴水ふんすい器きを設たけ
 吹上ふきある水みづハ水晶すいしゆうの柱はしらの如ごときごとき落おちて飛瀑ひびやくととなるる其その
 めめくををららふ高たかく突立とつたちせせハ埃及あゐが国こくより遷うつせせととら
 の長なが十四間じゆうしよかんと一石ひといしふて造つくりりととら一オブリスキあり彼方あつち
 け方かたお石像いしざうとあある瓦斯燈がすとうの高たかくく一基ひともとお数すう十じゆ
 と照てうすすものものと所ところ々々お設たく前まへハシヤンゼリセりせのの大おほ
 道みちお連つらりり鬱蒼うつそうととる緑樹りよくじゆの彼方あつちおハ玻璃はりの光ひかりり玲れい
 琅れうと博覽會はくわんかいの巨屋こゝろハハアルキドトリヨンブの

高閣の遙う小雲外小聳えうり右小「ラ」マドレンとらふ大
寺まゝ海軍場と望み左の塞納河の長橋設事院の
大宇突立して実ふ仙境の眺望もともめり過ぐと
思ひしぬ

商人の店の賑いさる「ル」ブル宮より北の方ふある「パ
ロ」ヤル宮の町ありさる町の中央ふ廣く四角ある草
花の園と設け四方の周圍ふ百貨と鬻ぐの商人
みらび新製の調度華美とさるめ「玩」弄びもの
金銀珠玉光りまをゆく三色五色ふ輝きうり
大さある商人の賣りの品と見せへ飾りつけず見

本斗りとと出るとあり買
人來まいた本ふて相談
とさる代物のとさる奥庫
より持出へ來るあり
品ものと見世の中おうら
く飾り付らるあり
小賣の店ふりく問屋ふ
有らずまゝ往來より見
えりやうお硝子障子の
中小品ものとみへ立らる

「パ」ルブル宮
表門前の
眺望



我朝の床見世天道が一の類ひあり
 我朝ふてがうと考げたる天秤棒と肩小掛て
 物と荷ひ往来と賣歩行の類ひの皆車の上小箱
 と乗せ其さく品物と入ると押廻るあり然もども
 大道と賣歩行の我朝の如くみらず只野菜
 物菓物小限まう
 天秤棒ふて物と肩小水屋小限まう水屋の六階
 七階の樓上まで水と荷を揚るゆゑ短く天秤棒へ
 鉄ふて張る桶の形ちの浅き器へ水と汲み入る
 運ぶあり器の浅き階子段へ底の支えざるがため

あり水屋の宿料の中小籠りて汲せる者より
 別小水賃と出す非ざる二階三階の低き部
 屋部屋へ桶ふて水と引と亞米理加の華盛頓府の
 條下小解ると同一

巴黎斯より東南ありつフランステブローとり地
 小故城あり往昔諸王の住せり跡ありて初代拿破
 崙配流せらるの時兵士小別と告の旧跡あり
 拿破崙が配流とあるや兩度ありて拿破崙士命の
 地小初めて戦功と著せりより猶浮沈ありとるども
 廿七歳ふて子ラル官小昇り埃及伊太利と討

普魯士埃斯利と援き三十六才ふして終ふ佛帝の
 位ふ登祚せりけし時ふあつり歐羅巴全弱ふおん
 魯西亞英吉利西班牙と除くの外に佛蘭西の
 命ふ従ひ進退意の如くならざるにあり故ふ拿破崙の
 かな英吉利と攻撃んと企つるとと英國の地勢日本と
 齊志く歐羅巴北海中の島ふあるゆゑ彼我より
 海軍の備へ十分ふ整ひつゝ軍と向るとも容易
 小勝利を難きと知り如く交易の道と絶て英
 吉利の国力と衰耗さうめんおのと思ひ急お各
 國へ檄文と傳え英吉利船の入津と止め英國産の

品もの一切用也べらざるの令と下せり然るに魯西亞
 帝歴山王の豫て仏蘭西と兵と接へんとするの心組
 ある故國人らが竊るに英吉利の商船と引入と諸
 物と貿易めすとりども知らず顔して捨置ける
 仏帝拿破崙破崙聞いざ大いお怒り直る魯西亞ある歴山
 王帝へ戦書と贈り群臣の諫言とも馳入とす歩兵
 四十万騎兵六万大砲千二百門と曳せ日耳曼国の
 スデン府めりりり換地利め命して兵士三万と出させ
 普魯士ふ命して兵士二万と出させ五月十六日諸勢
 一同の地ふ會し惣軍合して五十一万人仏帝拿破

破崙自將レて魯西亞の領地深く攻セりて時
魯西亞帝歴山王の仙軍の勢ハ拔山倒海の勢ハあ
とバ容易ニ當りテとて思ヒ戦ハずシて敵軍と苦
しむるの策畧と決シて仙蘭西の軍勢ハりテ至らズ
先ニ府縣村落の差別アリ自ら市街の家居と焼
すて皆空漠トる野原とモ深く内地へ引キありテ死
敵軍とシて我地の食料火薬ハ勿論宿陣ハめすベき
家居ハ人々をシめんと企テてシて仙帝拿破崙ハ始メ
魯西亞の首府ニイトルスボルフ府ニ攻入シんとシる
の結構ハりテ海軍の戦争ハ味方数回利ハと失フ

の注進ありけとバ急ニ策と多ク魯國の舊都ニモ
スコー府と攻んとシてスモレンスコの地ニ進ミて魯
西亞の大將ニテトリとシる者数隊の兵士と率ヒ来リ
爰ニ初メて兵と接シて勝敗ハいテ決セとシて元来
戦ヒとシば自ら頻リて火トと放チ城郭市街と
焼捨ツ次第ニ退ク然ル魯西亞の兵士中
勇氣ハある若武者ハハ策トして迂遠と諂
り仙蘭西勢とシて何カかそレ益ハ家居と
煙りとせんト一時ニ雌雄と決スるニ若シとシん
テトリが命と請ガりけとバテトリの策と失ハる

ちんとしておそと帝都トイトルホルクお返りトコ
 ソフとらふ大将ともお代りて指揮すまども軍勢
 ら狂請諾せまどもトコソウ止と得ずトボルチノ及び
 「モスクワの地お出張」ト蘭西軍とむくけらぬ
 拿破崙大いお喜び魯軍出て戦ふ早すぞお我物
 ありとして九月七日の曉天より諸軍と進めて攻め
 魚日西亞勢も討て出で互いお必死の勇と振り日の
 暮るまぐ戦ひまどもと魯軍の大將トコソフも能く兵
 卒と用ひけまども双方の討死三万人餘お過るとりども
 勝敗決せず其日の物別まどもとぞ成りおける明まども

八日の曉天お仏軍戦所へ操出まどもと魯西亞勢の
 夜の内お竊お陣と引えらひ早一人もお死なずあり
 ころ爰お於て「モスコ」府への道路忽ち罷さけら
 仏帝拿破崙の勢ひお兵直ちお兵と進ま
 「モスコ」府へ攻込まどもお府下の人民家財の勿論大
 猫まも携え去りて何方へや落失けん建連ねら
 大厦高樓も空然とく寂莫らり仏帝拿破崙是
 となく魯西亞人ら計策と豫め察し知ると
 しくども更小事とせず一隊とお陣營と配り各
 休息まらり然るお夜半のころ市街の中央の

家より火忽然と燃出すと
 相圖不諸方一度火事
 たりまう黒烟天とあふひ猛
 火焰々と立昇るとい仏の軍
 勢かどろろ騒ぎ彼方け方
 小走めぐるて是と救えんと
 為とも魯西亞の間者早
 く地中の水道と絶ち毀ち
 くるる水来らるるや如何
 小とも詮術あるさうち火勢



魯西亞へ
 拿破崙
 伐入る

まきやう盛んふあり府下一面小燃蔓延四日のあひど
 焚火せず終小郭中郭外と八九分どろり焼失ひさう
 けとと秋尽んとて天已小寒く雪稍降りて氷り
 封るの節小臨めい仏帝拿破崙いけ府内小滞陣は
 て春暖の折とまら猶何イトルホルク府へ攻込んと思
 ひい小圖らるるも今夜魯西亞の間者のため市街の
 家居と焼まらうば身小寒気と防ぐべし陣營あり
 口小生と養ふの食料絶えとて非凡英邁の拿
 破崙さへ如何ともあつて能はず困りて使節を以て
 和睦と結わんとする小魯西亞人こそと請うる

徐戈多軍と旋さんと決定し十月廿二日拿破崙
 惣軍と引渡ひ「モスコ」府と陣をらひく旧路を
 求め去んとぬると北地の寒風ますます烈しく
 氷り厚さぐ故小河水封じ陸地と成る少く
 通路の便似しと降積る雪の道と埋めて風
 威凜々面と削ぐ如く多と人馬とも小凍へ凍斃
 死ぬもの数と知らず魯西亞の將軍「トコリウ」是と
 見て味方の籌策十分當まり拿破崙を初め仏蘭
 西の軍卒らと塵ろし小せよとて其之り路ふと
 塞り或ひは左右小付纏ひて撃手攻ると間隙をけ

ともバ仏軍ハと引け戦ひ退くゆゑ一步往を
 敵小討と二歩進めを寒氣小倒と足と動す毎
 小死傷するもの多とあつず斯の如く多と五十二万
 除と聞えし大軍を尽く道路小死亡し令と全
 し魯西亞領の界と出さるる三万除人小す
 けり然ともバ仏帝拿破崙も兄の「ナポリ王」と共
 小単騎とあり辛く小都巴黎斯小歸着る
 是や前代未曾有の追討ふして翌年暖和の
 時来り雪の解るふ及んべと「モスコ」府より
 魯西亞領と越して「ナイメン」の地まで四百四十里の

間小四十万餘の死尸雪中ふあり一故ありけるか如
 姿めて 連綿と霧をけきくは是れは天の
 惨然袖とあわすぬら有らざるも然もが
 破崙飢寒のゆえ計らざる大敗と取り一費へに
 普魯士王忽ち反して瑞典あつて魯西亞と
 同盟を境と固むると嚴重あり
 所思いま因循して事を緩うせふ為さば列国の諸侯
 之を背き反せんと爰ふわらく強て三十五万の兵を募り
 翌年四月普魯士王の反心せしを討んと日耳曼の地
 小出張をとり普魯士王を聞き魯西亞へ援



兵と乞ふと最急あり然れ
 ども魯西亞小く拿破崙
 大敗の後るも容易小軍
 と動く一得と油断あり
 居るもいづれの報告あるも
 すまやふ全軍と出すと
 能はず先常備兵を以
 て普魯士應援のこゝ出
 張をせし時小く壞
 地利王も仏蘭西小反さ

魯西亞瑞典普魯士と同盟あり拿破崙と討んとする
 数万騎と操出せり因りて日耳曼列国もさる佛蘭
 西の羈絆と脱しこきと征せんし出兵すはしと英
 吉利の將軍「ウエルリントン」も葡萄酒西班牙の地あり
 て兩國の兵と助け仏国の東南より討入りぬ拿破
 崙は日耳曼の地の「テレステン」府と本陣とあり十三五
 万の大兵と要所配りて陣すとい同盟各國の軍
 勢も勝地ふ因り備へと布さ初秋の末より合戦始
 まり或ひは勝あるひは負冬のそめりつるといども
 於勝敗と別とごりて各國同盟方は日々夜々小人

数加より何十万とふと知らず爰において拿破崙へ
 敵軍の上ふも増さ味方いよく維茂らんあらず
 早く各軍と討破らんとい同盟の諸ねの斯る
 大軍を以て数日と経るも仏蘭西勢とを修不後置
 何みぞけ上り一時も宥豫させん退をらんとい互ひ
 の奮激切迫る一つひふ「ライフシツク」の地あり大戦
 争と成りたりけりけりや仏帝拿破崙
 の味方の惣勢と咽喉の要所あり圓ぞ各へ
 りて自らその中央に陳し進退かけひとの便
 するへ且應援働らると自在あると云ふ

各国同盟の大兵も勝地も因りて隊伍と操出り四
 面八隅より押廻り千八百十三年今より五十九年お
 の十月十五日朝霧の晴向と待て諸方同時にお合戦
 をトまり大小砲のひびき山谷とあるひ動り火薬の
 黒烟中天小巻さ上げ銃鎗のわと矢さげびの声
 おびく言ふ本りる一拿破奮身の與廢存
 亡只の一戦おありと決すまご生かしの力をけり
 用兵の絶妙と極め指揮するト毫も其度と差ひ
 ござる軍威ましく盛んあり同盟の各軍へ目お
 あまる大勢まご先鋒敗れもご後隊代り右翼

破るも左翼援ひ来つて戦ふ故更にお雌雄と決し血
 戦するト三日三夜おおよびり然まごも衆寡つひ
 お敵一ごも有りけん戦争をまごりより第
 三日めの十八日お至りてい仙軍次第お乱まごり
 や苦戦と成りのご陣列まごり能へごり
 お至まごば仙帝も天と仰て大息一今い是まごり
 とて鏖捕の如く取圍り敵の備へと打破り日づうの
 残兵と引具りて本国巴黎斯へ落退さぬけ會戦
 十六十七十八日の二日お渡り敵味方の死亡合せて四万
 餘人お過り実小古来稀多一大戦争おぞ在り

くる斯の如くさるる和蘭陀の国人もまた反ら国内
 すら「ボルボンの王室と與さんと企る者あり共和
 政治を復せんとするの黨ありては彼處に蜂起
 区内外とも瓦解及べ同盟列国の軍勢らに透さ
 ず巴黎期に押迫り都府防衛の兵卒をもち
 破り帝居「チイルリ」宮に攻寄せ「拿破崙」
 事の成らざるを決し降人とありて出づり爰に於
 て同盟の諸將らに「仏蘭西王十六世ロイス」の弟
 立て是と王と「仏蘭西十八世ロイス」と稱し「拿破崙」
 崙の帝位を廢し千八百四年の四月十日地中海の

中の「エル」が島へ流し「拿破崙」の配流さる「エル」
 島の番居に在りて竊る「仏蘭西」国内の容子を探
 る十八世「路易王」の温良の性質ありて外の隣国
 の交際と厚く「内」臣下の諫と納し国事小心
 と用おもども人民いさむ殺伐の気像うせず動も
 すまじ腕と振り炮と磨いて事を起さんと為るもの
 多しと受ければ「天」我を捨ずるとして土人千人
 除りと從へ翌年三月十一日竊る「エル」島を脱れ
 いで「仏蘭西」の南の海岸「カンヌ」の地の上陸し急
 小国中へ檄文と廻して舊縁ある兵士を招き

我も我もと走集りし
 小一万餘人とありし
 拿破崙の大い小喜び然らば
 け度と扱すましく巴黎斯
 の方へ奔向する小その名譽
 世上小普さかちあふ知るも
 知らざるも是を迎へて附
 従ふと水の底さ小飯する
 がどい仏蘭西王路易是を
 聞て大い小驚き頓小軍勢



と募り拿破崙が兵と防ぎ征せんとなどどの士卒
 ら却て戈と倒りし拿破崙が附バ拿破崙大軍
 とあり同月廿二日直小巴黎期小入りし小府内の兵も尽く
 是小従ふ因りし拿破崙が一路易王と逐出し再度帝
 位小昇りし一滴の血と流さず一発の炮丸と鳴さず
 一カシ子スの地小兵と拳てより僅三十日と過ぐる小仏蘭
 西全国復し拿破崙が有とありし時小當ツて同
 盟列国の将帥ハはる地利の首都ハインナ府小會
 合ありて在るがけ急報と耳に驚き呆と各顔
 と見え合せ哲時ハ辞も出さる然も各々の帥も是

と征伏するの容易をらざると思ふ故埃地利魯西亞
普魯士英吉利の四ヶ国ハ常備兵の外ハ各十五
万の兵と設け拿破崙を伐んとぞ條約ありある
因りて聯合の諸王より拿破崙へ戦書と贈り英
吉利普魯士の軍勢いち早く白身義国を以て出張
す普魯士の將軍ブリユセルハ「子」ムルの地ハ陳し
英吉利の將軍「ウエル」リントンハ其首府「プロツセル
ス」小營と設く埃地利伊太里の勢ハ北口より進み葡
萄牙西班牙の軍ハ南口より犯し魯西亞瑞典の兵
も西北の向より既ハ国界ハ迫らんとす爰ハ於て拿

破崙ハハ各國の兵ハ国内ハ攻入らむ何と以て當ら
んや如く彼の軍ハ先立て我より事と起さんふ
ハと決し十万余人の兵と將ひて六月十日即座ハ
巴黎期と發し同十五日不意ハ起つて普魯士の先
鋒と討やぶり進んで其本陣ハ押し迫り
拿破崙が兵と用ゆるの神速ある人知を以て測り
得べからざるハ時英吉利の本陣ハ「ウエル」リントン
と始めとして諸將打まとい酒宴を催 奥既
ハ蘭あるハ普魯士の本陣より馬と飛せし駐
進あればハ双の「ウエル」リントンもハ兵の神速ある

小警馬と嘆なげ夜半やんぱん俄い軍装ぐんさうと調しらへ急いそぎ手配ていり
 とぞぬぬくくりりるる 仏帝ぶつてい拿破なぱ崙わんハ普魯ふろ士勢しせいの本ほん
 陣じんと英吉利いんぎり勢せいの本陣ほんじんとの間まへ進すすむは是これと遮せぎ
 り英普えいふの軍勢ぐんせいとくく合併がっぺいするすことこととぬぬくくりりるる 爰こゝ
 小於あく英將えいしやう「ウエルリウエルリングトングトンの當朝とうてうより大雨おほいの降ふり
 そそぐぐともとも構かまはずはず「ヲヲルトルトロウロウの丘かみと取とり切きり爰こゝ
 小備そまへと設もちけけくくりり 地ちや樹木じゆもく森もり々と林はやしとぬぬく
 て一いち條じやうの帯おびと引ひくくるる 如ごとく河か小依せりりて遠とほく連つらりり三さん方ほうの
 潤うる然ぜんたるる 廣原くわうげんををどど野戰やせん小せぬぬの要地やうちををり 仏
 帝てい拿破なぱ崙わんハ並日ふひ魯士ろし勢せいの至いたらぬぬ先まに小如何いも

しく英吉利いんぎり勢せいと討破たうぱららるる 全勝ぜんしやうと得えべべきき 援會えんかい
 小こと思おもひひりりるる 故宿雨こしゆく濛もう々々とくく風かぜききくく吹荒ふきあるる 小
 も痿しますす 大浪おほなみの寄よるる 如ごとく猛勢もうせい小せぬぬ 小総せうそう
 軍ぐんと進すすままるる「ヲヲルトルトロウロウの丘かみ小押おかかるる 英將えいしやう「ウエ
 ルリルリングトングトンンハ是これと見みままるる 普魯ふろ士しの兵へいの来きるる と
 俟得まちえく戦せんんんとぬぬくく 由よし多た時刻じこくと移うつすす 策さくとぬぬくく 小
 既すでに小十二じふに字じ小向むかとすするる 小仏軍ぶつぐんの先鋒せんぽうをを 小間近まぢか
 小寄よせ来きるる 小とぬぬくく 小巢口すくわくちと揃そろええるる
 小大炮おほたうより打うち出すす 小弾丸だんがん鞠まり々々とくく 小影かげとくく 小火薬かやく



の黒烟勃々として渦巻き
 上る中、小仏將走せぬが
 兵と進めんとぬるに頻り
 あり然れども英軍の要
 害よりてまゝ大小砲と打
 立よば、仏軍猛けども進
 むと能はず、拿破崙氣と
 いらち騎馬隊と歩兵隊
 として英の中軍と討せん
 とする、小英將「ウエルリグ

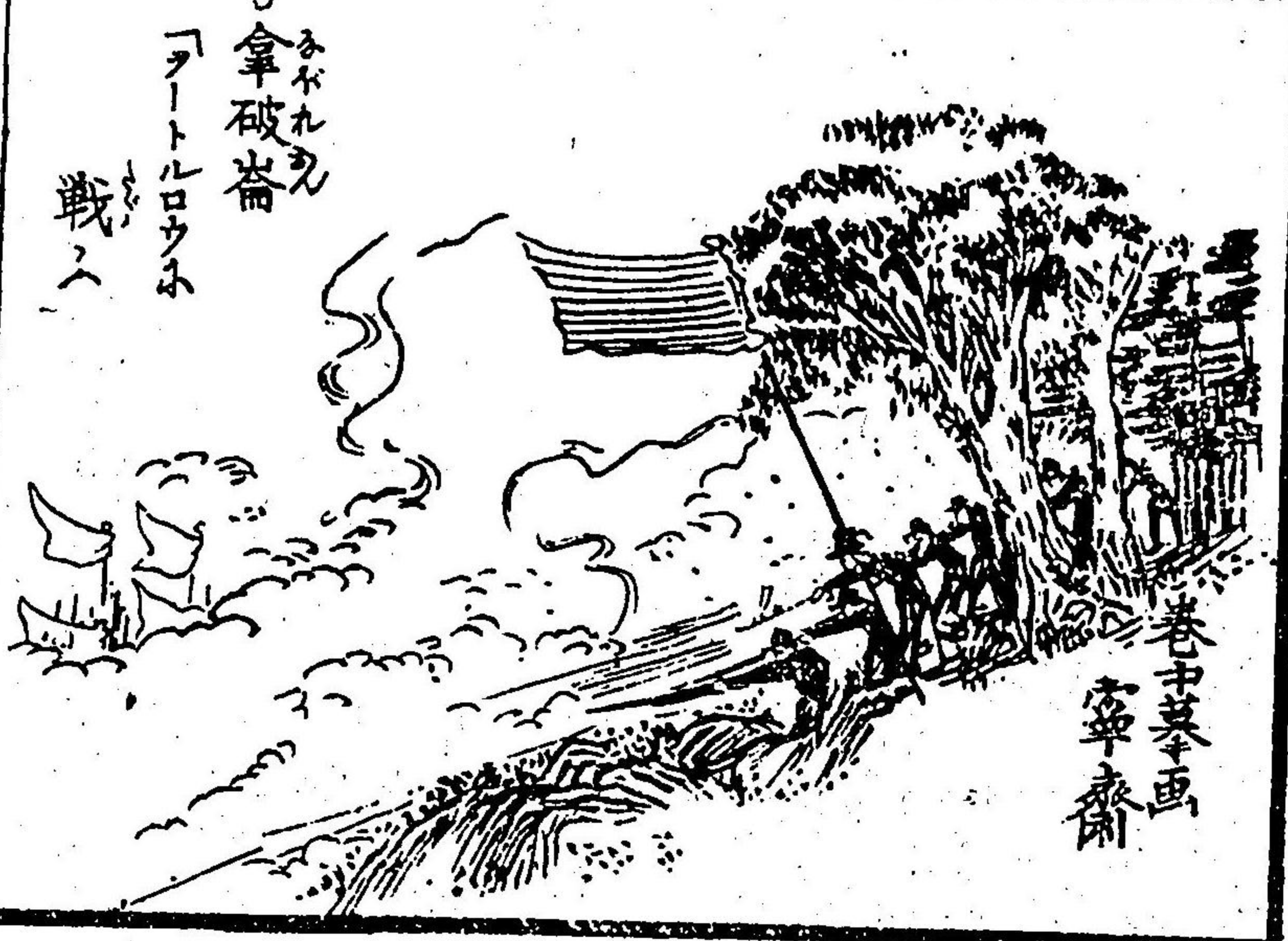
ドンハ早く其氣と察し是もまゝ騎馬隊と歩兵隊
 とらゝいて半途、是と迎へ戦はせむとば、仏兵破と
 て引退く英軍あきう、小追討せしと、仏兵急小取
 くと返し是と突と猛りけし、英の騎馬隊大に破
 らせ散らん、小成りて逃まよふ然れども、仏軍の歩兵隊
 の英の歩兵隊小蒐とせらるる敗北ありけし、小勝負半角
 と成りて功と奏せず、故小仏の一軍まゝ進んで英軍
 の右翼へ打めし、英吉利方小の豫て備へかゝるる
 三十門の大砲と一度小放つて打出せし、小仏兵屈せず
 前進して大砲隊と須臾のあり、小打破せり然れども

の勢と從之甲必と攻んし信必小打入り西條山
 小陣と布らり是れ依りて武田信玄同国貝津の城
 まぐ出張輝虎と討の謀計と山本道鬼小向ひけし
 道鬼答へて我が軍勢と二隊小分ち一隊を以て西條山小
 向させ一隊を以て路小俟バ輝虎西條山の勝敗小関係らず
 兵と引く国へ歸らん其意と窺ひ半途小く是と撃バ勝す
 と言とめらべらずと言けし信玄もは策を可しと高く
 坂飯富馬場甘利とらと二万二千の將とまり夜小を以て西條
 山小向ひめ自八十餘兵と率ひて竊小廣瀬と渡つて川
 中島小屯せり輝虎西條山小在て貝津の城小兵糧

の煙りの兩度小昇ると窺ひ望と指さく諸將小謂我
 信玄と軍と結び戦ひと挑むとすは十五年小至き
 とも信玄その謀策と差はず然る小今初めて是と失
 せりと即八千人の兵と帥ひく西條山と奔し雨の宮
 の渡りと越え夜の明ると待く軍とらす法令嚴重
 ると人馬声とを以て信玄之と知らず黎明小
 至つく其旗印と見る然とも信玄自若とく動せず
 備と定め隊と分ちく之と俟つ輝虎兵と進めて来り
 戦ふ其勢ひ雷電の落ゆるごとく山川是がぬ小振ふけ
 一戦とるや輝虎西條山へ向ひる武田勢の引返り来ら

ざる前ふ早く信玄が本陣を討破らんとおひ信玄へ固
 く守りて西條山へ向ひたる味方の引返一来るを俟ち
 戦えんとす然ととも輝虎が侵撃行と割るの勢ひ
 あまの其接戦の急あると実前代未聞あり故小兩
 軍の死傷夥しく信玄疾と被り信玄の弟武田興
 厩山本道鬼初鹿源五郎とりの豪士討死し甲刃の兵
 や敗んとす時小西條山小高ふ処の諸兵来つて後方
 より輝虎が陣と襲ふ輝虎が軍前後の敵を對する
 と能はず大の小敗とて走る甲刃の兵是と追ひ殺す
 首を得ると三千余級輝虎猛ありととも戦ふと

能はず僅ふ和田喜兵衛と
 従へて越後ふ歸り是は
 三才の小兒ととも能知り
 得る咄一なかりヲトルロウ
 の戦争ふ鬚髯なる戦ひを
 まが歐羅巴国の英傑も我
 日本の名将も智勇の人の
 ある処に其策畧の似たる
 と歎ト我と忘れて之用の
 事と爰ふ贅一ぬ



卷中草画 寧齋

みかれえ 拿破崙

戦入

再説英仏の戦争勝敗の事、決せざるふ日、落天既の暮
 ころ、時小普魯士の將軍ブリュセルハ十二万の兵と率ひ
 けとらへ走付来り、仏蒙西勢の後背より大山の崩り
 如き勢力ひきて、突然と攻め、とが拿破崙ハ猶味方を指揮
 奮激血戦すると、之ども前後の大敵ハ進退窮り、仏軍
 次第ハ打破らるゝ、終ハ惣敗軍とあり、英普の両勢大いふ之と
 追討させり、け戦争ハ當く、仏兵の討死四万、普兵の討
 死二万六千、英兵の討死一万五千、六百入、通計七万千六百入
 の兵戦死させりと云ふ、と以て大激戦とると知るべし、然
 らば拿破崙ハ身と脱と、亞米理加ハ渡り去んとするハ

航海の便りと失し、七月十五日、英の船將「マートラント」の爲
 小捕虜とあり、各国の評議と以て、再び拿破崙の帝位
 と廢し、亞非利加、勿の中、の西の海、カント、ヘナの島、小流
 ころ、然らば、拿破崙ハ爰ハ禁錮せらるゝ、幽居すると六年
 小して千八百二十年、今より五十二年、おの五月五日、五十一
 歳と一期とあり、終ふら、島小死し、ころ、後二十年と経
 て、仏蒙西より、英吉利ハ請ひ、皇帝の礼と以て、拿破崙
 崙と、巴黎期ハ歸葬せしと云ふ
 拿破崙配所ハ在りて、常ハ歎息して云ふ、今より五十一年
 の後、歐羅巴、島一大變革を、我ハ仏蒙西の如きハ、魯普西亞の

西洋新書四編之下終

る小併せらざるんが共和政治とあるべし而して魯西亞普
魯士の二国強大に至り勢ひ我んど歐劔と壓ひたりと
拿破崙帝死せるの日より昨年既ふ五十年の星霜を經る
小至り歐羅巴各国盛衰あり殊ふ仏蒙西の如らる普魯
士のる小領地と失ふて少るらざる国帝捕虜ふ附く共和
政度と成り豈奇みならずや英雄俊傑の卓見後世の
事と示す小我現在と看るが如し誰う感嘆をばざらんや
仏蘭西普魯士の新戦争も後條小至り折を以て猶説
べし

西洋新書満備きを稿既小成績を出版

官許

明治五壬申年仲春

瓜生政和編輯



寧齋柳坡畫

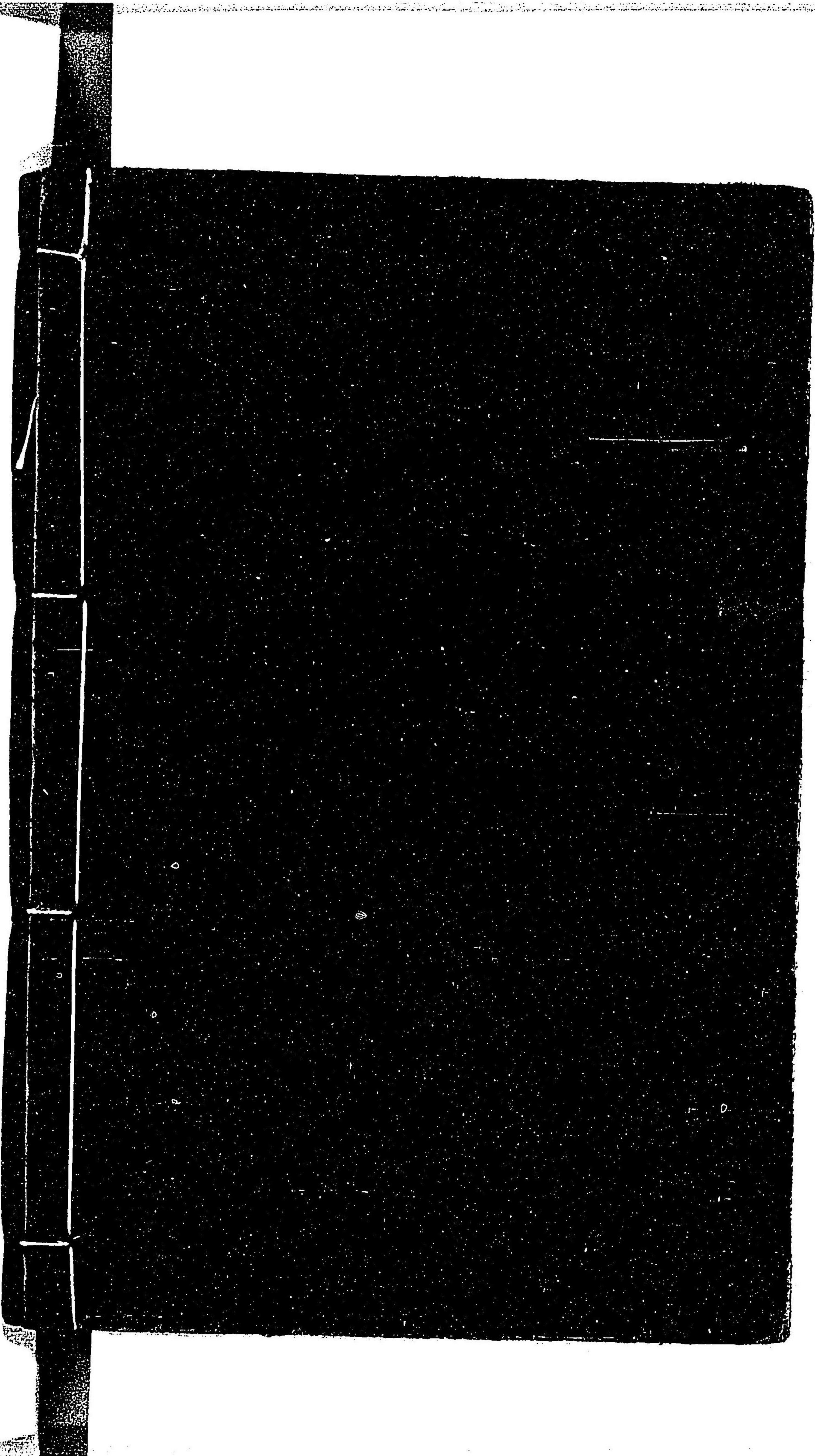


梅村宣和藏梓



東京書林

大和屋喜兵衛發兌



育會書館
室
特31
671
275
332
四冊

西本